
人知れぬ (読みきり)

さと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人知れぬ （読みきり）

【コード】

N5950J

【作者名】

やと

【あらすじ】

中世のおとぎ話風味の読みきりです。

(前書き)

読みきりです。

はじめまして皆さま、こんなへんぴな所へようこそお越しく
さいましたね。

……おやおや、二度目のご来訪の方もいらつしやるじゃありませ
んか。うれしいですね、ここを覚えておいでだったのですか。

そう、ここはかの有名なアトランティス 私はアトラティアと
呼んでいます が見えていた崖。

と言っても、大昔に海にしないでしまつてから随分経ちますので、
今はさびしい地平線しか見えませんがね。

ではさっそく、今日も話しましょう……エリーゼ、しずかにして
なさいね。眠つてて、良いからね。

『エツィプト（エジプト）は私のもの、ヨールパ（ヨーロッパ地方）
も私のもの』

かつて、そう言った女がおりました。

女は純金の玉座にすわることを許された人物で、いつも大事そうに
王冠をかかえておりました。

女は支配者としてはすばらしい人間でした、そして愚かでした。す
べてがやがて自分のものになると信じてやみませんでした。

海をみつめてはサファイアのついた指輪を、空をみつめてはター
コイズのついた首輪を、大陸をみつめてはエメラルドのついた耳飾
りを見るようにほほえみました。

じきに手に入るであろうお宝たちを、うっとり眺めていました。

『ミヤー（マヤの国）は私のもの、アスティーカ（アステカ帝国）も私のもの』

かつて、そう言った女がおりました。

女はアトラティアの国民全員を愛しておりましたが、敵国の国民となれば、話はべつです。

アトラティアに住む敵国の国民全員に、自分への忠誠をちかわせました。

そうすれば命はすくってやる、と言われた国民たちはかならず女の前にひざまずきました。

女はうつくしかつた、しかし、中身はなんとも混沌としていた。

慈愛と冷徹……ほほえみとなみだ……期待と絶望……これらと同じ量ずつもちあわせているような女でした。

エツィプトの砂漠のように、これらすべてをキレイに自分のところの中に隠すことができました。

『エツィプトとヨールパのすべて、すべての財産と、文化と、国民たちの笑顔は私のもの』

ある時はそう言って、他国とアトラティア帝国でエツィプトの土地を（まるでアップルパイのように）わけあおうという提案をことわりました。

当時のアトラティアは世界でもっとも強い国でしたから、だれも、女に無理強いをすることはできませんでした。

ある時、女の夫が亡くなりました。女はなみだをこぼしながらこっぴど叫びました。

『グリシユア（ギリシャ）が、ほしい。ああ、あの人のおのぞみになつていたグリシユアのすべてがほしい！』

グリシユアのすべて、すべての財産と、神々のつくった文化、その国民たちの笑顔がほしい。こう叫びだしました。

この叫び声は切なく王宮にひびきわたり、海のさざ波がうたう歌声をも止めたといひます。

近習も、近衛兵も、みな切なく悲しい気持ちになりました。

その女と、その夫のかわいらしくほほえましい風景をよく見ていたからです。

夫といた時の女の笑顔は、まるで恋を知ったばかりの乙女のように愛くるしく、夫の笑顔もまた、恋に目ざめたばかりの少年のようにかがやいておりました。

『そうすればあの人は笑ってくれる、夢に出てきて私に語りかけ、やさしく頬をなでてくれる！』

なかば発作的に叫んだこの声に、国民たちはどう思ったのかは分かりません。

グリシユアは思いのほか強く、アトラティア軍が、めずらしくも数を四万以下にへらされてしまいました。

両軍ともつかれはてているなか、くるしい思いで戦場をふみつけました。

女はたいそう戦がとくいであったので、じきじきにこの軍の指揮をしておりました。

『 すずめえええ！！我ら勇敢なるアトラティア人は、けっして、誰にも負けぬのだああ！！』

自分に言いきかせるように叫ぶ女は、みずから戦場に躍りこんだと伝えられております。

いつの時代も、死を恐れぬヒトほど怖ろしいものはありません。きつと夫に先立たれ、おのれの命などどうでも良くなってしまったのでしょうか。

ただグリシユアが自分の物となることだけをのぞんだのです。

その時です。グリシユアの最高神ゼウスが立ち上がったほどの高さかと思われる波が、陸のななめ上にて、女を見下ろしておりました。

女はひざが笑いだしているなか、必死の思いでアトラティア兵を退散させようとします

しかし、遅かった。

波はすべてを公平にのみこみ、神々のすまいである神殿たち以外のすべてを押し流し、やがて濁流となって戻り 逆流をはじめたのでしょうか もういちど人々を飲みこみはじめました。

その様子は、赤ん坊が必死であたえられたミルクをのみほそうとしているのに、よく似ていました。

女は最期に、夫の名前だけつぶやいて、あの世に逝きました。

どうやらその津波は、逆流した後アトラティア帝国の領土すべてまでのみこんでしまったらしく、大西洋には大量のドロだけが浮かんでおりました。

グリシユアに出兵していた者たちのうち、あの津波から助かったア

トラティア人でさえ、みな、祖国を想った涙で枯れはててしまいました。

「こうして、アトラティア人とアトラティア帝国は消えました」

「…。」

「……すごい、最期ですね」

話を聞いていたうち一人の女が、あっけにとられたまま唇をつごかしていた。

となりの中年よりすこし年をとった様子の男が、話し手を自慢げに紹介する。

「なんてったって、この話し手の話し方がうまいからな。」

「欲ばりさんにゃ何の徳もないってのを、ただ淡々と話してきただけでございます」

「また、そうして謙遜なさるって……おや、もう日が暮れている。」

「まあまあ……貴方がたの家族が、きつとお家で待ってくださいさっていますことでしょう。お帰りなさい」

太陽のように笑った男は、妻が心配しだしてるだろうから……と言っ
つて、行ってしまった。

「家族がいるうちに、はやくお帰りなさい。」

みな、この一言が気になったのだが、何も言つまり、思つまり…
…と、今聞いた物語ごと、自分の胸にしまいこんだ。

エリーゼとよばれた小さな少女は、話し手の顔の三分の一をおお
っている布の奥にある瞳を見た。
赤い光が、二つ、マントの奥でかがやいている。

「ねえね、アトラ。さっきのお話って……」

「そうよ。」

「そっかぁ……でも、なんで話しちゃったの？」

アトラとよばれた話し手は、布をとり、自分の顔を月光にさらした。
かつてアトラティア人の代名詞にもなった、ルビー色の瞳である。
……今、この色の目をしている者は、世界で数人しか存在しない
ようになってしまった。
だから、アトラはいやがおうにも目立ってしまう。
なので、こうしてマントについた頭巾をかぶり、その中にさらにう
す布をまいて隠しているのだ。

アトラはエリーゼと同じ目線になるためにしゃがんで、エリーゼ
の青い瞳をまっすぐ見つめた。

エリーゼはともきれいな少女で、ヨーロッパ人の理想的な外見を
していた。

……彼女のお父さまにそっくりだ。

「誰も、私のご先祖さまみたいにしたくないの。だから、ご先祖さ
またちのお話しながら旅してるんだよ。今朝も言ったでしょう？」
「でもアトラ、皆しあわせに見えるよ。アトラのご先祖さまみたい

じゃなかった」

「……そうね。そろそろ、次の国に行きましようか」

「次？ 次はどこへゆくのか？ イギリス（イギリス）？ イタリア（イタリア）？」

「……エリーゼ、原因は私にあるから、そう強くは言えないけど……」

……そのアトラナマリ、どうにかしなきゃね。

彼女はずいぶんと、私に染まってしまったものだ。

アトラナマリはアトラ人でも理解しにくい発音がおおいので、なるべく早いうちになおした方がよい。

そうだ、ドイツ（ドイツ）へ行ってみてはどうだろうか。

ドイツ語は濁音がおおくてむずかしいから、覚えようとすると、なまりがポロツととれてくれるかもしれない。

「よし。それじゃあ……ドイツに行こっか。エリーゼ、ドイツは好き？」

「うんっ！ 大好きよ、クリスマスのとき、とくに町がとってもきれいなんだもの！」

「そうなの？ じゃあ、今すぐ行こっか。クリスマスのドイツが見れなくなっちゃっわ」

エリーゼの小さな手をひいて、アトラは北を目指した。

(後書き)

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5950j/>

人知れぬ （読みきり）

2011年1月20日03時19分発行